

秦嶺山脈西部秦漢三國遺址視察記

水間大輔
柿沼陽平
猪原達生
峰雪幸人

二〇一三年八月二七日～九月四日、水間大輔・柿沼陽平・猪原達生・峰雪幸人の四名は、秦嶺山脈西部（現陝西省・甘肅省）の交通路とその周辺の秦漢三國時代遺址を視察した。

秦嶺山脈は乾燥地帯（華北）と湿潤地帯（華中・華南）の境界線（所謂秦嶺・淮河線）にあたり、三國時代には秦嶺・淮河線のほぼ北を曹魏が、ほぼ南を孫呉と蜀漢が占めた。西安―秦嶺山脈―漢中を結ぶ唐代以前の主要幹線には、東から子午道・駱谷道・褒斜道・漢中秦川驛道（〓陳倉道、嘉陵道）の四本があり、そのほかに漢中から秦嶺山脈を西へ迂回し、略陽・西和・祁山を経て天水に出る祁山道などもある。嚴耕望氏は上記諸道についてこう概説している。¹⁾

①子午道は前漢時代以来の道で、險阻なことで知られる。蜀漢の北伐時には魏延が子午道を通って長安を攻撃する計画を立てたが、諸葛亮に却下された。唐初には驛道が設置さ

れ、玄奘もこの子午道を経て入蜀している。

②駱谷道は曹魏が曹魏・正始五年（二四四年）の蜀漢討伐時に通過したことで知られる。蜀漢・姜維の北伐や、曹魏・鍾会の入蜀時にも利用された。唐代には驛道が設けられ、徳宗による興元府（漢中）への行幸時や、僖宗の西行時にも利用された。

③褒斜道は四道中最古の戦国以来の道で、一部に棧道をふくむ險阻な道であり、後漢時代に多用された。後漢末になると、漢中の張魯政権が褒斜道の交通を遮断したが、のちに張魯が敗れると、ふたたび多用されるようになった。諸葛亮の第一次北伐では趙雲らの陽動部隊が褒斜道を行軍し、第五次北伐では褒斜道を経て五丈原に駐屯した。さらに曹魏の曹真が蜀漢を攻めた時も褒斜道を通過している。以上の東晉成立以前の褒斜道を一般に「褒斜旧道」とよぶ。一

方、北魏時代には梁泉界―武休関間の道が新たに開鑿された（いわゆる褒斜新道）。これ以降、陳倉道沿いに宝鶏界から梁泉界へ南下し、そこから褒斜新道沿いに武休関に南下し、最後に褒斜旧道沿いに武休関から漢中に出るることができるようになった。唐代以降はこの道が一般に「褒斜道」と呼ばれるようになった。唐代には玄宗が蜀へ逃れた時に褒斜新道を通り、徳宗・僖宗も帰路に褒斜新道を用いている。④漢中秦川駅道（＝陳倉道）は嘉陵江沿いにあり、嘉陵道ともよばれる。曹操の張魯征伐時や諸葛亮の第二次北伐時（陳倉へ出撃時）に利用されたことがある。

以上が嚴耕望説の概略である。このように秦嶺山脈には史上著名な交通路が四本あり、この他に細い数本の道や、さらに西方に祁山道などがある。また後述するように、周辺には秦漢三国時代の遺址も点在する。とくに秦漢交代期には劉邦が漢中に封ぜられ、その後、三秦方面へ出撃しており、その周辺には関連遺址も散見する。三国時代においても蜀漢と曹魏が当該地域周辺を争ったことで知られる。さらに仇池政権は、秦嶺山脈を迂廻する諸道をおさえることによって、南北朝期に半独立勢力を保持している。これらの詳細は『史記』・『漢書』・『後漢書』・『三国志』・『華陽国志』・『晉書』等に見えるが、当時の人びとがどの道を行くかという理由で選択し、それが戦略上どのような意味をもったかは、机上で文字史料を読むだけでは理解しがたいところも

ある。そこで、本調査ではとくに秦嶺山脈西部の交通路と秦漢三国遺址を可能なかぎり視察した。具体的にいうと、まず西安から太白界までは省道二一〇号線を通り、太白界から漢中までは褒斜旧道を通って南下し、漢中周辺の関連遺址等を視察した。その後、今度は漢中から北上した。その際に漢中から略陽までは陳倉道、略陽から天水までは祁山道に極力沿って移動した⁴⁾。そして天水を視察後、最後に東進して宝鶏を経由し、西安に戻った。以下、旅程順に詳細を説明する。なお移動は基本的に四輪自動車によった。また本稿で示した遺址の位置（緯度・経度・海拔）は Google Earth 上で衛星写真を目視することによってえられたものである。二〇〇七年以降中国で外国人がGPSを使用することは事実上禁止されており、現地でGPSを用いて計測することができなくなったためである⁵⁾。さらに、本稿末尾には嚴耕望説をもとに地図を附したので、適宜参照されたい。

八月二十七日（火）

水間は二四日に山東省青島より一時五〇分発のEU六八三六便で西安に到着。柿沼・峰雪・猪原の三名は二七日に各々JL八六三便（成田空港発）・NH九〇五便（成田空港発）、CA一六二便（関西国際空港発）で北京に到着。ともに一時一〇分発のMU二一〇四便で西安に到着。西安市内の西安城市酒店で宿泊。

八月二八日(水)

八時四〇分、西安城市酒店を出発。九時二五分、西安市未央区三橋から西宝高速にのり、宝鶏方面へ西進した。唐代には西宝高速のやや北側に主要幹線があり、それは武功県・扶風県・鳳翔県・汧陽県・汧源県へ西進し、そこから上邽県(現在の天水市)に向かうものであった。⁶本調査後半に訪れた街亭はこの道沿いにある。しかし、この道を通った場合さらに時間を要するため、本日は西宝高速を通った。当初はその後、五丈原(後述)を視察する予定であったが、断続的豪雨のため、予定を変更して宝鶏市付近を見学した。宝鶏市はかつての陳倉県にあたる。陳倉はもと陳宝とよばれ、その古城の起源がいつなのかについては諸説あるが、「陳倉」の地名自体は少なくとも統一秦に遡る。⁸その後、唐・至徳二年(七五七年)に陳倉県は宝鶏県へ改称された。陳倉・宝鶏という地名の由来や、陳倉のちに宝鶏へ改名された理由には諸説ある。⁹

一一時五五分頃、代家湾村に到着。陳倉古城付近を見学。陳倉古城は上城・下城にわかれ、上城は戦国秦の文公が築き、下城は曹魏の郝昭が太和年間(二二七～二三二年)に築いたと伝わる。¹⁰『三國志』等によると後漢三国時代の陳倉は交通の要衝で、曹操や夏侯淵は長安から散関や祁山へ出る際に陳倉を通過した。¹¹また所謂陳倉下城は堅城で、諸葛亮は第二次

北伐のとき、二〇余日間も雲梯・衝車・地突等の方法を用いて攻めたてたが、落とせなかった。¹²陳倉古城遺址は現存するらしく、写真を撮影した研究者もいるが、我々は遺址を発見できなかった。一九三七年以来調査された鬪鶏台溝東区墓葬(陝西省宝鶏県城東南約一〇キロ)は秦代陳倉城(つまり陳倉上城)の故地ともいわれ、他にも付近からは一九八三年に秦漢時代の房址四座や灰坑・地穴一七五ヶ所が発掘され、陶器・銅器・印章・封泥等も出土した。¹³また宝鶏県東北約三〇キロの武城鎮の千河周辺には石鼻城もあり、諸葛亮が郝昭を防ぐために築城したものとみられる。¹⁴しかし石鼻城の遺構等も見つからず、九月三日に再視察することとした。詳細は九月三日の条参照。

一四時頃、西安市から約二時間かけて宝鶏市の中心部に到着。宝鶏市民俗博物館を見学。当地にはもともと宝鶏青銅器博物館があつたが、宝鶏青銅器博物館は二〇一〇年に別の場所へ移転し、宝鶏青銅器博物館の跡地に宝鶏市民俗博物館が置かれた。宝鶏市民俗博物館では二〇一〇～二一世紀の宝鶏市の民俗を紹介していた。その後、宝鶏青銅器博物館も見学し、売店で資料を収集した。一八時頃、宝鶏市白雲賓館に到着。

八月二九日(木)

七時四五分、大散関へ向けて出発。宝鶏く大散関の道は三国時代の陳倉道で、本稿冒頭で挙げた嚴耕望説にみられると

おり、曹操の張魯征伐時や諸葛亮の第二次北伐時に利用された。約一時間後に大散関（北緯三四度一六分一七・二三秒、東経一〇七度〇分三六・三一秒、海拔八七六メートル。省級文物保護単位。写真1）へ到着。大散関は宝鶏市南大散嶺上に位置する。「散關」の名の由来に関しては、西周時代散国の関所とする説、狭隘な場所が開ける意の「散」とする説、西周文王を救った散宜生が封建されたとする説、⁽¹⁷⁾ 現地を流れる散谷水によるとする説がある。⁽¹⁸⁾ 古代散関の位置には諸説あり、現在と同じ大散嶺上とする説、⁽¹⁹⁾ 現在とは異なる場所にあつたとする説がある。⁽²⁰⁾ 後説の例としてたとえば李仲操氏は、漢代には益門鎮付近に、南北朝期には益門鎮、觀音堂間に、唐代には觀音堂西にあつたとする。そして金軍が宋軍と対峙した際に、新たに二里関を設置し、明代に二里関が散関とよばれ、清・嘉慶年間（一七九六〜一八二〇年）にそこに「古大散関」碑が建てられたとする。⁽²¹⁾ 現在は觀光地化され、関の城壁等は復元済で、入口には郭沫若揮毫の「大散関」の扁額もあつた。階段を登ると、復原された烽火台（海拔約九〇〇メートル）もあつた。烽火台の上から風景を望むと、東西に山々が連なり、その谷間に大散関が位置すること、谷間に川・道路・鉄道があることが看取できた。なお漢中争奪戦時に散関を訪れた曹操は、散関の險阻さを歌った「秋胡行」を作っている。⁽²²⁾

九時四五分、大散関を出発。以後、度々の通行止めに遭い



[写真1] 大散関の烽火台上から西方を望む

ながら、漢中を目指した。まず宝鶏の市街地に戻ってから省道二一〇号線を南下した。しかし、交通事故等の通行止めで迂回を余儀なくされ、一・一五分に塞子嶺から省道二一〇号線へ戻った。道路状況は劣悪で、たびたび交通事故や工事に悩まされた。急勾配の蛇行路を馬尾河沿いに南下したが、すれ違うのはトラックばかりで、一般乗用車はほとんどない。一・二三分、海拔一七八〇メートルに達した。一・二五五分には太白県中部（嘴頭鎮）を経、その後は褒斜旧道沿いに南下した。太白県は一九五三年に嘴頭鎮と周辺七県の一部を統合して設置された県である。²³

一・二四〇分、馬槽溝隧道付近で下車。「中国文物地図集 陝西分冊」下冊によると、この辺りに乾隆二二年（一七五七年）の褒斜道修復の記念碑が立てられているはずであるが、発見できなかった。近隣住民によると、現在は工事でなくなつたらしい。周囲には建設中の高速道路がみえ、褒斜旧道沿いに郿県・漢中間を結ぶ予定とのことである。²⁵

一・三時一〇分、王家楞を通過。一・三時一八分、王家楞南の褒斜棧道遺址（省級文物保護単位）を視察。崖の側面に数十センチ四方の穴が八つ確認できた（写真2）。棧道を支える木材はこれらの穴にはめ込まれていたであろう。先行研究によると、蜀漢の食糧倉庫「赤崖（岸）」が王家楞付近、留壩県より北の紅崖里、もしくは王家楞南の西壩村にあるとされ、それらの先行研究がさししめす場所は相互に近く、ま



[写真2] 褒斜棧道遺址

めると「赤崖」は本棧道遺址付近か。現に付近の土は赤みがかった。なお蜀漢期の「赤崖（岸）」付近には「閣道」や「屯田」もあったらしい²⁸⁾。また曹魏の司馬懿は諸葛亮没後に蜀漢軍を「赤崖（崖）」まで追撃し、そこで退却した。これより赤崖は「死諸葛走生仲達」の舞台としても有名である。一三時四五分、漢中市留壩県に入った。一四時二〇分頃、渋滞。一四時四〇分、交通事故で通行止め。

一四時五〇分、武休関を通過。「武休関」の地には唐代に駅が、北宋中期には関が置かれ、のちに散関とともに宋・金間の戦場となった²⁹⁾。

一五時一〇分、馬道鎮の「蕭何追韓信処」（北緯三三度二七分五七・五〇秒、東経一〇六度五九分三三・八〇秒、海拔九〇一メートル。市級文物保護単位）に到着。ここは秦嶺山脈から南に流れる褒河と、西から褒河に合流する寒溪河の合流地点である。当地の伝承によれば、劉邦に愛想を尽かした韓信は漢中から逃亡し、ここで氾濫する河に阻まれ、蕭何に追いつかれた³⁰⁾。清代の石碑が三枚立っていた。一六時頃、事故による通行止め。

一六時二〇分には漢中市北郊の石門風景区（国家重点文物保护单位）を見学。この地は褒斜道の入口にあたり、陝西省考古研究所が一九六〇年と一九六三年に調査を行っている³¹⁾。

方孝文氏はこう説明する。すなわち、一九六〇年の調査により、この周辺で一〇四件もの摩崖石刻が確認された。著名な

のは所謂「漢魏十三品」（現在、漢中市博物館蔵）である。中でも「衰雪」摩崖は石門南一〇〇メートルの褒水中の巨石上に刻まれている。幅一四八センチ、高さ六七センチ、字径三五〜四六センチ。題目の横に「魏王」の二字が刻まれており、一般に魏王曹操を指すものと考えられている。「魏王」の二字は後人の筆になるものであるが、「衰雪」は後漢・建安二三年（二一八年）に曹操が現地の雪景をみながら揮毫したとされる。また、「李苞通閣道」摩崖（清・羅秀書が石門北で発見）には曹魏・景元四年（二六三年）一月一日に邊寇將軍浮屠侯の李苞（字は孝章）が兵や石木工二千人とともに本道を敷設したと記されており、「潘宗伯韓宗元李苞通閣道碑」摩崖も同内容を伝える。後者は西晉・泰始六年（二七〇年）の建碑であるが、現物はつとに失われ、隋唐期に石門南の石上に重刻された³²⁾。以上が方孝文氏の説明である。現在は観光地と化しており、崖には棧道が復元されていた。一七時三〇分頃に出発。

一八時五分、漢中市の金江大酒店に到着。

八月三〇日（金）

八時四五分、金江大酒店を出発。八時五五分、漢中市博物館を見学。漢中市博物館は劉邦の漢中王即位時の宮殿跡「古漢台」（市級文物保護単位）に建てられている³³⁾。館内には漢中市の文物・石刻等が展示されていた。一〇時一三分、漢中

市博物館を出発。

一〇時一七分、拝将台（漢中市城区南環中路南側。北緯三
三度三分五〇・一七秒、東経一〇七度一分五三・四八秒、海
抜五〇九メートル。省級重点文物保護單位）を見学。拝将台
は劉邦が韓信を將軍とした時に築いた基壇とされる³⁸。現在、
中央壇上には巨大な韓信像が建てられている。敷地内には
「夜影神碑」（あるいは夜影碑）もある。この碑には何も刻ま
れていない。現地解説文によると、韓信殺害後、劉邦はそれ
を悼んで蕭何にこの石碑を建てさせたが、呂後の権勢に妨げ
られ、碑文を刻むことができなかった。この碑を建てたとき、
夜になると発光したので、「夜影神碑」と名づけられたとい
う。ただし、我々が調べたところ、この伝説の文献上の典拠
は確認できなかった。

一〇時四〇分、拝将台を出発。高速道路を東進して城固県
に入る。城固県は後漢代の「成固県」にあたる³⁹。道路沿いに
水田とトウモロコシ畑が広がり、路上に脱穀された稲やトウ
モロコシが干されていた。秦嶺山脈の北側はほぼトウモロコ
シ畑であったが、南側は水田が多く、秦嶺山脈の気候・環境
上の南北差を感じさせた。

一一時二〇分、李固墓（城固県柳林鎮小营村。省級重点文
物保護單位。写真3）を見学。李固は後漢後期の漢中南鄭の
人で、太尉まで昇進したが、外戚の梁冀に疎まれて誅殺され
た（『後漢書』李固列伝）。墓の周囲は手入れがされておらず、



[写真3] 李固墓と墓碑

水田の脇を少し入った所に、清・畢沅揮毫の「漢大尉李固墓」の墓碑と墳墓があった。畢沅（一七三〇～一七九七年）は清代の著名な歴史家・官僚で、乾隆三十五年（一七七〇年）に陝西按察使、翌年に陝西布政使となり、『関中勝迹図志』等を著した。畢沅は陝西在任中、この李固墓碑の他にも省内の皇帝や著名な人物の陵墓に数多くの墓碑を建立している。李固墓は長方形で、南北四二メートル、東西二三メートル、高さ五メートル。『水経注』にもその存在が確認される。李固は誅殺された時、南郡の外れに質素な身なりで殯斂するよう遺言した⁴¹。しかし、その後李固の死を嘆く者が出、漢中で本葬することになったという⁴²。もともと唐・韋臯による碑文があったが、清代までに失われたようである。一一時三〇分に出発。

一一時五〇分、張騫紀念博物館と張騫墓（城固県博望郷饒家宮村。北緯三三度九分三〇・四四秒、東経一〇七度一七分二八・二九秒、海拔四八六メートル。全国重点文物保護單位。写真4）を見学。張騫は漢中成固の人で、漢武帝期に月氏への使者として派遣され、西域に関する詳細な情報を前漢にもたらした（『史記』卷一三三大宛列伝、『漢書』卷六一張騫伝等）。張騫墓は一九三八年に西北聯合大学（現在の西北大学）が発掘調査し、墓前から石獸が、墓内甬道から漢代五銖銭や封泥のごとき土片等が出土したが、多くは戦争や文革で散佚した⁴⁴。現在内部は整備され、漢代の文物数点と東西交渉に関



〔写真4〕張騫紀念博物館

する展示があった。張騫紀念博物館も併設され、張騫を地元
の英雄として称揚する旗や垂れ幕があった。一二時二五分に
出発。

一二時五五分、楽城遺址付近を視察。楽城は蜀漢・建興七
年（二二九年）に諸葛亮が築いた城である。唐代には西楽城
とも呼ばれるようになった。⁽⁴⁶⁾ 遺址の現状について『諸葛年譜』
等は城固県北の慶山赤土坡上に遺構が残るとするが、『康熙
城固県志』巻二建置は「今爲平地」とし、我々も遺構等を視
認できなかった。なお諸葛亮の北伐と楽城の関係について、
第五次北伐（二三四年）時に楽城を通過したとする説と、楽
城を経ずに直接褒斜旧道を北上したとする説がある。⁽⁴⁹⁾

一四時五〇分、蔡倫墓（洋県竜亭鎮竜亭鋪村。北緯三三度
一二分二〇・六六秒、東経一〇七度三五分五八・九六秒、海
抜四八〇メートル。全国重点文物保护单位。写真5）・蔡倫
紙文化博物館を見学。蔡倫は後漢代の宦官で、元興元年（一
〇五年）に「樹膚・麻頭及び敝布・魚網を用いて以て紙と爲」
し、「蔡倫紙」とよばれた（『後漢書』宦者列伝蔡倫条等）。

蔡倫墓・蔡侯祠は蔡倫の出身地である湖南省耒陽市黄市鎮に
も存在する。⁽⁵⁰⁾ 一方、漢中市洋県に蔡倫墓があるのは、蔡倫が
「竜亭侯」として竜亭県（現在の漢中市洋県）に封じられた
ためであろう。⁽⁵¹⁾ 蔡倫墓は南北三〇メートル、東西一七メート
ル、高さ七メートル。墓前に三枚の石碑があり、それらのう
ち「新建祠記碑」は現存する最古の蔡倫墓碑で、明・万曆三



【写真5】 徳宗御筆とされる「蔡侯祠」の扁額

一年（一六〇三年）のものである。⁽⁵²⁾ 墳墓の周囲は「蔡侯祠」
という廟となっており、「蔡侯祠」の扁額は唐・徳宗の御筆
である。博物館では当時の製紙法が再現され、製紙法の変遷
や関連文物等（製紙工具の鉄鍋・石臼、製紙原料の構樹皮・
竜須草等）が展示されていた。一五時二五分に出発。

一五時三〇分、竜亭インターより京昆高速を西進し、漢中
市内を経て勉県に向かう。

一六時五三分、諸葛亮墓（武侯墓）（勉県定軍山鎮諸葛村。
北緯三三度七分一三・四八秒、東経一〇六度三八分五八・二
五秒、海抜五八七メートル。全国重点文物保护单位）を見学。
諸葛亮墓は本来定軍山にあり、蜀漢・景耀六年（二六三年）
に諸葛亮を祀る祠（いわゆる武侯祠）も並置された。⁽⁵³⁾ しかし、

明・正徳八年（一五一三年）に都御史藍璋が武侯祠のみを勉
県武侯鎮武侯村（翌三十一日に訪問）に移築し、現在は武侯祠
と武侯墓が分立している。一七時二〇分、出発。

一七時二七分、諸葛亮墓付近の定軍山（勉県定軍山鎮定軍
村。北緯三三度七分一〇・四〇秒、東経一〇六度四〇分八・
二五秒、海拔六七六メートル）を見学。定軍山は曹魏と蜀漢
が漢中を争った時の主戦場で、曹魏側の夏侯淵が蜀将黄忠に
斬られた場所でもある。清・謝鍾英『三国疆域表』卷一八漢
中郡沔陽県条「走馬谷」補注に「即定軍山谷」とあり、清代
に定軍山の谷間は「走馬谷」ともよばれた。定軍山の麓には
かつて諸葛亮の八陣図・督軍壇があったとの伝承がある。ま
た定軍山の上から「武侯兵書匣」が見つかったとの伝承もあ
る。山上や山麓では頻繁に三国時代の扎馬釘・鏃・鉄刀等が
出土するらしい。駐車場から徒歩で登山したが、中腹に陣地
を再現した櫓やテントがあった。一七時五五分に出発。一九
時一〇分、金江大酒店に到着。

八月三一日（土）

本日はもともと西和県南部の仇池山を視察する予定であつ
た。しかし、現地運転手によれば仇池山への道は劣悪で、数
時間がかかるとのこと。そこで仇池山視察を断念し、午前中
に漢中周辺と勉県周辺を視察した。

七時二〇分、金江大酒店を出発。七時四〇分、虎頭橋（漢

中市中心広場前、漢中城北門付近）に到着。虎頭橋は魏延が
殺された場所とされる。道路沿いの建物敷地内に五件の石碑
があったが、工事中で近づけなかった。魏延は義陽の人で、
蜀漢期の将。劉備に抜擢されて漢中を守備し、諸葛亮の北伐
でも戦功をあげた。しかし、諸葛亮の死後に楊儀らと対立し、
馬岱によって殺された（『三国志』卷四〇蜀書魏延伝）。『乾
隆南鄭県志』卷一〇古蹟によると、虎頭橋で殺された魏延は、
近くの石馬堰（漢中城北門外。現在は石馬坡ともいう）に埋
葬され、近くの田間には「石馬」があったという。魏延の殺
害場所と埋葬場所は近く、説明のつく距離ではある。墓上の
「石馬」は実際に確認されており、一九七三年に漢中市博物
館へ移管された。

七時五五分、漢中古城牆を見学。一九九五年に漢中市人民
政府の設置した碑によると、現存の城壁は明・洪武三年（一
三七〇年）に重修され、二〇〇一年に一部修復されたものと
いう。左湯泉氏によると、洪武三年の重修後も、正徳五年
（二五〇〇年）、清の康熙・嘉慶年間にそれぞれ修築されてい
る。

八時三〇分、漢中市博物館を再訪。前掲の魏延墓「石馬」
と民国期の「張嶷墓碑」を写真するためである。張嶷は巴郡
南充国の人で、蜀将として周辺諸族の平定・慰撫に活躍した。
延熙一七年（二五四年）、姜維とともに北伐し、狄道で戦死
した（『三国志』卷四三蜀書張嶷伝）。民国一〇年（一九二一

年)の墓碑には「漢盪寇將軍張巖之墓」・「置南鄭縣知事白河柴守愚立石」と記されている。『大清一統志』卷一八六漢中府・二陵墓篇によると、張巖墓はもともと南鄭県柏郷街にあり、「褒徳侯將軍墓」と呼ばれ、高さ二〇メートル程の墳墓もあつたらしい。なお、前述した魏延墓石馬は現在公開されておらず、実見することはできなかった。八時四五分、漢中を出発。九時一五分、勉県北に到着。

九時三三分、馬超墓・馬超祠(勉県武侯鎮継光村。北緯三三度九分一六・八〇秒、東経一〇六度三十八分一六・四四秒、海拔五六二メートル。省級重点文物保护单位)に到着。馬超は扶風茂陵県の人で、蜀漢の将となったのち、章武二年(二二二年)に沔陽(現在の勉県)で病死した(『三國志』卷三六蜀書馬超伝)。祠の門の道路を挟んで向かい側に、畢沅が建立した墓碑があつた。「漢征西將軍馬公超墓」・「清乾隆四十一年陝西巡撫畢沅書立」と刻まれている。蜀漢・建興五年(二二七年)に諸葛亮が馬超墓へ詣でて祭祀を行ったとされ、そのとき馬超の弟の馬岱も喪に服したとも伝えられるが、これは『三國志』にみえない伝承である。明代には「馬場」ともよばれた。なお伝・馬超墓は他にも複数存在する。九時四分、出発。

九時四八分、勉県武侯祠(勉県城西四キロ川陝公路上。北緯三三度九分三・九四秒、東経一〇六度三七分五二・二三秒、海拔五五七メートル)に到着。現在、中国では他にも古隆中

武侯祠(湖北省襄樊市)・成都武侯祠(四川省成都市)・祁山堡武侯祠(甘肅省礼県)・白帝城武侯祠(四川省奉節県)・五丈原武侯祠(陝西省宝鸡市)・南陽武侯祠(河南省南陽市)・丞相祠堂武侯祠(浙江省蘭溪市)・保山武侯祠(雲南省保山市)がある。『三國志』卷三五蜀書諸葛亮伝によると、勉県武侯祠は最初の武侯祠で、唯一詔によつて修築された。先述の通り、当初は定軍山の麓にあつたが、明代に現在の場所へ移築された。内部は祠堂以外に北伐の説明や武将の立像、六〇あまりの石刻がある。なかでも貴重なのは唐・貞元一一年(七九五年)の沈迥「蜀丞相諸葛忠武侯新廟碑銘并序」で、武侯祠最古の碑文であり、碑陰・碑側に宋・元・明代の補刻もある。また琴楼上に石琴があり、「章武元年」(二二二年)の刻文がある。諸葛亮本人の刻文とする伝承もあるが、李復心(清・嘉慶年間の武侯祠住職)『忠武侯祠墓誌』は「石琴爲晋代物也」とし、「山西文人胡輅穎」の作とする。一〇時二五分に出発。

一〇時三分、古陽平関(勉県武侯鎮蓮水村。北緯三三度八分五一・九二秒、東経一〇六度三六分五〇・八七秒、海拔五六六メートル。省級文物保护单位。写真6)に到着。陽平関は漢中の要害で、三国時代には曹操の張魯征伐や曹操側と劉備側の漢中攻防戦の舞台となつた。付近に巨大な馬超騎馬像があつた。文物碑によると、現存部分は三〇〇メートル程、城壁底辺の幅は八メートル、上辺の幅は六メートル、高さは



[写真6] 復元古陽平関

八メートル程である。近年の三国志ブームを受けて勉県政府が整備したらしい。⁽⁷⁵⁾ 現存の古陽平関は三国時代の陽平関と同一の場所にあったとは限らず、むしろ両者は一般に異なるとされる。たとえば張東氏は、本来陽平関は山上にあり、蜀漢期に山麓に移築されたとする。この他に、蜀漢期には陝西省内にもうひとつの陽平関があり、両方とも曹魏と蜀漢の戦地であったとする説もある。⁽⁷⁷⁾ 古陽平関は「白馬城」や「張魯城」ともよばれ、張魯城については、古陽平関の西側を流れる咸河の、さらに西側に位置する走馬嶺に存在したとする説もある⁽⁷⁹⁾ (写真7)。一〇時五八分、出発。

一一時二七分、漢城遺址(勉県元山鎮元山子牟家宮一帯。写真8)に到着。川の側に丘陵がそびえ立っており、現地農民によるとこの丘陵上に漢城遺址があったという。漢城は蜀漢・建興七年(二二九年)に諸葛亮が築城とともに築いた城である。⁽⁸⁰⁾ のちの沔城で、山や平地にあわせて築かれた土壁の城とも伝わる。⁽⁸¹⁾ 郭清華氏・侯素柏氏は二〇〇二年時点で城址が残っており、頻繁に三国時代の武器が出土するとする。⁽⁸²⁾ 『漢中地区志』第三冊も二〇〇五年時点で漢城の「址」があると⁽⁸³⁾ する。しかし、我々は今回何らの痕跡も確認できなかった。

以上で漢中市及び勉県での調査を終え、一一時三八分に勉県を出発し、省道(三〇九・三〇五・二〇五・二一八号線。三国時代の祁山道にほぼ一致)を経て甘粛省西和県に向かっ



【写真7】陽平関から走馬嶺を望む



【写真8】漢城遺址とされる丘陵

た。諸葛亮は街亭敗戦後に「西縣千餘家」を漢中へ連れ帰ったが、この「西縣」は西和県周辺⁽⁸⁴⁾、もしくはさらに北方の天水西南に比定されている。一三時頃に略陽へ到着して昼食をとり、一三時四〇分に出発。略陽を北上するとトウモロコシ畑が増えて水田が減少し、一四時二五分には海拔一〇〇〇メートルに達した。祁山道は概して褒斜道よりも緩やかであるが、激しく蛇行していた。省道二〇五号線を西漢水沿いに北上し、一六時三三分に索池郷を通過。一六時四五分、西狭頌景区の入口で休息。一七時一〇分頃、省道二一八号線に入る。一七時二五分、崖崩れで通行止め。一九時頃、西和賓館（西和県）に到着。西和県内で仇池村出身者の女性に訊ねたところ、西和―仇池間の所要時間は車で片道二時間程度とのことであったが、運転手はもつとかかるはずと予想した。仇池を訪問した先学の記録をみると、やはり相当な時間を要するように思われた。なお前掲仇池村出身者は、「仇池周辺では村ごとに方言が異なり、相互の方言は聞き取れるが話せない」等の他に、「一二月頃は道が氷結するので仇池に行くのは困難」とも教えてくれた。今後仇池を訪れる場合、冬場は避けた方がよいようである。

九月一日（日）

本日は、当初の計画ではまず西和県博物館を見学する予定であった。しかし、現地で確認をとったところ、同博物館は

西和県人民政府の庁舎内にあり、日曜日は官庁が休日のため、博物館も休館であることがわかり、見学を断念した。

昨夜インターネットで調べたところ、西和県に「仇池碑林」という施設が最近造られたことを知り、行ってみることにした。八時半頃到着。西和県の西郊に隍城という山があり、その山の中腹に仇池碑林がある。ちなみに、この山には南宋の呉玠が築いたとされる「十二連城」があり、それらのうち大皇城・小皇城・皇城・呉玠墩などの城址が今もなお残っているという⁽⁸⁵⁾。城址のように見えるところもあつたが、確認できることはできなかった。現在ではこの山全体が「隍城森林公園」として整備されている。

仇池碑林は現地の石碑によると、二〇〇六年一月一日に竣工した。残念ながら本日は休館日らしく、門が閉まっていた。外から中を覗いてみたところ、二〇近い石碑が立ち並んでいた。仇池碑林という名称からすると、仇池国や仇池山にちなむ石碑を集めたもののごとくであるが、石碑の内容・年代とも確認することはできなかった。もっとも、後日調べたところによると、ここには北宋・紹聖三年（一〇九六年）の「宋故左中散大夫王公儀神道碑」が所蔵されていることがわかった⁽⁸⁶⁾。門から見て正面に、一つだけ透明のプラスチック板で覆われた石碑があつたが、これがその王公儀神道碑である。西和県を発ち、山間の道（省道二一九号線）を北上した。やがて道の両側に迫っていた山々が遠くへ離れ、周囲が開け

てきた。一〇時一二分、祁山（礼県祁山郷祁山村。北緯三四度一三分五〇・二九秒、東経一〇五度二三分三九・八四秒、海拔一四九六メートル。写真9）に到着。『水経注』巻二〇漾水に、

祁山在嶓冢之西七十許里，山上有城，極爲巖固。昔諸葛亮攻祁山，即斯城也。漢水逕其南。

とあるように、祁山には城が築かれ、諸葛亮が北伐の際にこれを攻めている。『三国志』巻三魏書明帝紀青龍二年（二二四年）条に、

先帝東置合肥、南守襄陽、西固祁山、賊來輒破於三城之下者、地有所必爭也。

とあるように、祁山は合肥・襄陽と並ぶ魏の重要防衛拠点であった。祁山は南北両側を東西に走る山脈によって挟まれた平野の中に立つ、孤立した丘陵である。比高五一メートル、周囲六二三メートル^⑧。右の『水経注』によると、漢水がその南をめぐっているというが、今もなお南側には川（西漢水）が流れていた。山頂に至るまで、螺旋状に二〜三層に削られており、馬面らしきものもいくつか見えたが、堡の遺構なのか否かはわからない。他に遺構らしきものは見えなかった。

観光地として整備され、しかもコンクリート製のこぎり型狭間がめぐらされるなどしているので、いずれにせよ遺構は相当の改変を被っているものと思われる。後述する武侯祠とともに、現在では県級文物保護単位に指定されている。南牆



[写真9] 觀陣堡から撮影した祁山堡

からは鏃が数個発見されている。⁽⁹³⁾また、城内からは漢代の井戸が発見されており、鏃と漢代の五銖銭が出土している。⁽⁹⁴⁾山頂には武侯祠が築かれている。晉代に初めて築かれたもので、歴代の補修を経て今日に至っている。⁽⁹⁵⁾武侯祠の外には明清期の石碑が三枚立てられていた。

祁山から南を望むと、丘陵の上に観陣堡（後述）が見えた。また、観陣堡から東へかなり離れた丘陵の上にも、城壁のようなものが見えた。賈利民氏によると、祁山周辺には二四八もの堡があるという伝説があり、実際に五万分の一の航測地図（一九七五年製）で数えたところ、西漢水北岸に約九〇余り、南岸に約一〇〇余りの古城堡があるという。年代については、殷代中期のものもあれば、明清期のものもあるとのこと。⁽⁹⁶⁾

一〇時五〇分頃祁山を発ち、西漢水を渡り、一一時〇五分に何台村へ到着。この村の山頂には観陣堡（何台堡址。礼県祁山郷何台村。北緯三四度一三分六・九二秒、東経一〇五度二四分七・二一秒、海拔一六〇六メートル）が築かれている。観陣堡は『水経注』漾水に、

城（祁山堡）南三里冇亮故壘。壘之左右猶豊茂宿草、蓋亮所植也。

とある「亮故壘」のことと考えられ、諸葛亮が祁山へ出兵した際、祁山堡の南に築いたものとされている。西漢水を挟んで祁山堡の南南東約一・五キロに位置し、一里≡約五〇〇メー

トルとすると、右の記述で「城南三里冇亮故壘」とあるのとちょうど一致する。この山は全て段々畑によって覆われていた。麓からは城壁が見えないため、登山道の選択には苦労したが、一二時一二分には我々四人とも山頂にたどり着いた。

観陣堡は北東牆・南東牆・南西牆・北西牆の四つから成る。Google Earthの衛星写真上で測量したところ、北東牆は約一・二〇メートル、南東牆は約三・〇メートル、南西牆は約一・四〇メートル、北西牆は約七・〇メートル。堡内から目算したところ、北東牆と南西牆の高さは約二メートル、南東牆と北西牆の高さは約四メートル。⁽⁹⁷⁾城壁の幅は人一人が通れる程度であった。⁽⁹⁸⁾城壁は版築で築かれている（写真10）。

北西牆は北西に向かってはり出すように湾曲しており、その外側に馬面が三つ設けられている。祁山堡からはこの北西牆と馬面がはっきりと見えた。南東牆の外側にも馬面が一つ設けられている。北西牆と南東牆の外側は比較的緩やかな斜面となつているのに対し、南西牆の外側は切り立った崖となっており、また北東牆の外側も南西牆外側ほどではないものの、やや角度のある斜面となつている。それゆえ、防禦のやや弱い北西牆外側と南東牆外側にのみ馬面が設けられているのである。

南西牆の北部、北東牆と北西牆の接点、南東牆の西端に城壁の切れ目が見える。『中国文物地图集 甘肃分册』下册は南牆に門が設けられているとする。⁽⁹⁹⁾それゆえ、南東牆西端の



[写真10] 観陣堡 北西牆外側

切れ目が城門であり、他の切れ目は後世の破損によって生じたものと考えられる。特に、南西牆は外側が断崖となっているので、門が設けられていたとは考えられない。

城壁にはところどころ穴が開けられていた。城内から見ると、北西牆に三つ、北東牆と南東牆の接点の一つの穴があった。これまでの城址調査の経験からすると、版築で築かれた城壁には後世の農民が横穴を掘って食糧や物品を保存したり、あるいは祠として利用する例があるため、調査当時にはこれらの穴も後世のものと考えていた。しかし、賈利民氏によると、観陣堡は周囲の動静を観察するため、四辺の城壁に全部で七つの「観察孔」があり、それらのうち三つは北牆（本稿でいう北西牆に相当する）に設けられ、さらに三つのうち中央の穴は祁山堡を向いているという。さらに、観察孔の両側には矢を避けるための保護牆、観察孔の前には通路と休憩室が設けられているとのこと。北西牆内側の三つの穴はいずれもちょうど馬面の内側に位置し、中でも中央の穴は馬面の外側からも確認できる。また、北東牆と南東牆の接点に開けられている穴の内部は確かに意外と広く、右へと曲がる通路のようなものが見えた（写真11）。

城壁は南西牆と南東牆にやや欠損が見られるもの、おおむね極めてよく残っていた。城内は畑となっており、陶片が数多く散らばっていた。城壁の外側は全て段々畑となっており、あたかも日本中世の山城のごとく、本丸を中心として郭



【写真11】 観陣堡
城内から見た北西牆（左）と北東牆（右）

が設けられているようにも見えるが、もともと郭として設けられていたのか否かは定かでない。観陣堡から北を望むと、祁山堡がはっきりと目視できた。

一二時三八分に下山を開始し、車へ戻った。省道三〇六号線で北東へ向かい、一三時〇五分に咀頭村到着。この村には点将台遺址（北緯三四度一四一分一・六〇秒、東経一〇五度二三分四一・五五秒、海拔一五〇三メートル。写真12）があり、諸葛亮が築いたものとする伝説がある。祁山堡の北北西約六〇〇メートルに位置し、省道北側の丘陵の頂上にある。丘陵は比高約八〇メートル、頂上の広さは約七平方メートル。一三時一七分に頂上へ到着。頂上には土台のように盛り上がったところがあり、その上に建築物の壁の下部らしきものが残っていた。壁は楕円状になっていた。この壁の上には現在大きな柏の木が生えている。明清期には祠廟が建てられていたらしいが、その痕跡は見えない。ここからは祁山堡・観陣堡とも目視できた。

一三時二〇分に点将台を発ち、省道三〇六号線で北東へ向かい、一三時三五分に塩官鎮へ到着。『水経注』漾水に、

〔鹽官〕水北有鹽官、在幡冢西五十許里。相承營煮不輟、味與海鹽同。故地理志云、西縣有鹽官是也。

とあり、前漢の隴西郡西県には塩官が置かれていたとされているが、その地が現在の塩官鎮と考えられている。三国時代の「鹵城」もこの地にあつたとされる。古来より塩の産地で



[写真12] 点将台

あり、関中・隴中・隴南一帯ではこの塩官鎮と漳県塩川鎮を除けば、塩が乏しく、当地は経済的に重要な地点であった。唐の杜甫も当地を訪れ、塩の製造を実見し、「塩井」という詩を残している⁽¹⁸⁾。中華人民共和国建国後も二、三百世帯が塩業に従事していたが、近年では塩業から離れる者が多くなり、二〇〇八年当時では、塩業に従事する家は三世帯を残すのみとなった。

省道三〇六号線の南側に「塩井祠」(塩神廟。県級文物保護単位)があり、塩婆婆(塩聖母)という塩の女神が祀られている⁽¹⁹⁾。塩婆婆がいつから祀られているのか、またこの祠がいつから存在するのは定かでないが、境内の石碑によると、現在の建物は一九八九年に再建されたものである。境内には塩井があり、一番奥の塩神閣には塩婆婆の塑像が安置されていた⁽²⁰⁾。塩神は中国各地で信仰されているが、大多数の塩神は男性であって、女性の塩神は全国的に見ても珍しいという。

一四時〇〇分に塩官鎮を発ち、一五時一〇分に天水市内の天水市博物館・伏羲廟(国家級重点文物保护单位)へ到着。天水市博物館は一九八六年に伏羲廟の中へ移された⁽²¹⁾。内部は広大で、石器時代から明清期までの青銅器・陶器・石刻・書画など、さまざまな文物が展示されていた。伏羲廟は明の成化一九年(一四八三年)に創建されたものである。それは秦州知州の傅鼎が伏羲生誕の地である秦州にも廟を建設すべきと唱えたことに起因する。明清期に九度修築され、今日に至つ

ている。⁽¹⁰⁾境内は広大で、建物の内部には伏羲の巨大な像が安置されていた。明代以降の石碑も数多く保存されていた。

一六時二五分に伏羲廟を發ち、一六時三九分に李広墓（甘肅省天水市秦州区石馬坪。北緯三四度三四分五・八七秒、東經一〇五度四三分三〇・九二秒、海拔一二二・一メートル）到着。李広は隴西郡成紀県（現在の甘肅省靜寧県南西）の人で、前漢の將軍。対匈奴戦線において活躍した（『史記』卷一〇九李將軍列伝、『漢書』卷五四李広伝）。この李広墓は衣冠塚と考えられている。⁽¹¹⁾墳墓へと続く墓道の左右に馬の石像が向かいあって立っていた。これは漢代のもので、「石馬坪」という地名はこの石馬に由来する。墳墓の前には民国二三年（一九三四年）に蔣介石が記した「漢將軍李廣之墓」という巨大な石碑が建てられていた。現在は武術学校が併設されており、子どもたちが稽古をしていた。

一六時五〇分に李広墓を發ち、一七時一五分に天水市内の和平大酒店へ到着。

九月二日（月）

本日は朝から雨が降った。八時二〇分に出発し、国道三〇号線を北上して秦安県へ向かった。九時頃には道の両側の山上に城壁や狼煙台がいくつも見られた。一一時二七分、秦安県の隴城鎮に到着。隴城鎮は女媧の出身地とされる地である。鎮の中心部には「媧皇故里」という門牌が建てられてい

た。門牌の前には「竜泉井」と呼ばれる井戸があり、女媧が黄土をこねて人を造ったときに使用した水と伝えられている（北緯三五度〇分五・二五秒、東經一〇五度五八分二九・九六秒、海拔一四九七メートル）。また、現地の説明板によると、秦の始皇帝が「阿育王」を征伐したとき、兵士・軍馬はこの水を飲んだという。⁽¹²⁾

鎮内の女媧祠の前に駐車し、そこから東に位置する三国街亭古戰場遺址（北緯三四度五九分三四・一八秒、東經一〇五度五九分〇六・四二秒、海拔一五八八メートル）へ向かって歩いた。街亭は「街泉亭」の略称である。前漢では街泉県が置かれていたが（『漢書』卷二八下地理志下天水郡条）、後漢では街泉亭となり、蜀の北伐の際には魏軍との間で大規模な戦闘が行われた。もともと、街亭の位置については唐代以来諸説あるが、近年では隴城鎮に置かれていたとする説が有力である。⁽¹³⁾街泉県・街泉亭の「泉」は先述の竜泉を指すとすると、説もある。⁽¹⁴⁾

途中、道路左側の民家の敷地内に城壁の一部らしきものが見えた。版築の跡が明確に見とれた。『中国文物地図集 甘肅分冊』下巻によると、隴城鎮内には北魏・清の隴城故城遺址が残っているという。⁽¹⁵⁾それによると、城址は本来東西五〇〇メートル、南北二五〇メートルの城壁で構成されていたが、現在残っているのは西牆のうち二〇〇メートル、東墻のうち二〇メートルのみである。底部の厚さ五メートル、頂部

の厚さ三メートル、高さ八メートル。東西南北の牆にはそれぞれ門が一つずつつけられていた。⁽¹⁶⁾ 街亭が現在の隴城鎮に置かれていたと解する説は、この城址の前身を前漢の街泉県⁽¹⁷⁾後漢の略陽県⁽¹⁸⁾街亭と解している。しかし、徐日輝氏によると、隴城故城の東一里余りに宋代の城址があり、地元では「新城」と呼ばれているという。⁽¹⁹⁾ 我々がここで見た城壁は鎮の東方に位置するので、あるいはこの新城の一部かもしれない。

さらに東へ向かって歩くと、「三国街亭古戰場遺址」（県級文物保護単位）の文物碑が道路の左側に立てられているのを見つけた。この道路の南側に丘陵があり、馬謖が陣取った「南山」はこの丘陵とされる。頂上に近づくと石段が築かれていたが、まだ造りかけであった。一時五〇分、頂上に到着。頂上には東屋と石碑があり、そこから少し離れたところにも石碑が立てられていた。いずれもごく最近建てられたものである。頂上からは周囲の地形がよく見えた。

一二時四五分に隴城鎮を発ち、天水市内へ戻り、一四時四〇分頃昼食をとった。昼食の間に我々の車が路上駐車の手取りに遭い、出立が大幅に遅れ、一六時一五分にようやく天水を発った。時間があれば鳳翔県の秦雍城遺址を視察する予定であったが、断念せざるをえなくなった。

国道三〇号線で宝鶏へ向かった。夕方、かなり濃い霧に包まれた。白雲賓館泊。

九月三日（火）

本日は八月二八日にたどり着けなかった陳倉故城・石鼻城と、本来二八日に視察する予定であった五丈原を主に視察した。

七時三〇分に賓館を発った。陳倉故城は霍彥儒氏によると、現在自動車学校と工事現場になっているという。⁽²⁰⁾ 八時五五分にその自動車学校へ到着したが、陳倉故城の遺構は確認できなかった。当地の男性（六三歳）によると、五〇年前には城の遺構ははっきりと残っており、山の上にも城址があったという。自動車学校の地にあったのが下城で、山上の城址が上城であろう。

九時二五分、石鼓寺（宝鶏市陳倉区千河鎮魏家崖村）に到着。この付近に石鼻城址があるはずであるが、⁽²¹⁾ 周辺を歩き回っても遺構らしきものは見当たらなかった。一九九六年刊の『宝鶏県志』によると、城壁が残っているとのことであるが、⁽²²⁾ 今もなお遺構が残っているのかは村民に尋ねてもはっきりしなかった。石鼓寺から上へ登ると、小さな閔帝廟があった。

一〇時三七分、五丈原（岐山県蔡家坡鎮五丈原村）に到着し、諸葛亮廟（省級文物保護単位）を見学。三国時代の末年に建てられ、明清期に修築が繰り返され、文化大革命終了後、人民政府による大規模な修築が行われ、現在の形となった。⁽²³⁾ 境内には諸葛亮の衣冠塚があった。これも三国時代の末年に造られ、明の嘉靖年間に修築されたものという。⁽²⁴⁾ 廟内には諸

葛亮博物館が設けられていた。北伐の説明と関連遺跡の現状が写真で展示されていた。

一二時二〇分、豁落城（落星鄉竜泉原村北。北緯三四度一三分一〇・四四秒、東経一〇七度三七分三五・四八秒、海拔七一メートル。写真13）に到着。袁全福氏によると、ここは諸葛亮が本陣を置いたところで、東西約五〇メートル、南北約五〇〇メートルの城壁が現存するらしいが、北牆しか確認できなかった。現地農民に尋ねると、畑を造成する際にはとんど壊されたらしい。城壁の内外は全て畑で覆われており、地表には陶片が散らばっていた。南北に細長い台地の上に位置し、東西は切り立った谷になっていた。

一二時四五分に豁落城を発ち、一三時に諸葛泉（五星村）へ到着。蜀軍が五丈原に駐留したとき、水を軍中に供給した井戸と伝えられる。現地の石碑（一九九八年のもの）によると、五星村には「上泉」と「紅溝」という二つの泉があり、前者は蜀軍の兵士、後者は馬が水を飲むのに用いられ、前者が諸葛泉と呼ばれるようになった。蜀軍がここに駐留して水源を守ったので、「上泉屯」とも呼ばれるという。泉は武侯祠へと続く階段の下にあり、石で覆われ、八角形を呈していた。

一三時二〇分に諸葛泉を発ち、一三時三〇分に高店街へ到着。高店街は五丈原の北約一キロ、渭水の南岸に位置する。

ここは三国蜀の建興一二年（二三四年）、第五次北伐のとき、



【写真13】豁落城北牆

蜀軍の先鋒を務めた魏延が駐屯したところと伝えられる。後世の人々が魏延を記念し、この地を「魏延城」と呼んだとい¹³⁵う。

一四時二分、斜谷の入り口に到着。斜谷は秦嶺山脈の北麓に位置する谷で、当地を流れる斜水をその名称の由来とする。斜谷は褒斜旧道の入口である。¹³⁶

一五時三五分、柳巷城址（眉県常興鎮柳巷村。北緯三四度一三分四三・六三秒、東経一〇七度四九分三〇・三一秒、海拔一六〇メートル）に到着。二〇一〇年以來、陝西省考古研究院が発掘調査を行っており、それによると城址の概況は以下の通りである。すなわち、城壁はほぼ正方形を呈しており、一辺の長さは約一六〇メートル、高さ約二メートル、頂部の厚さ約七メートル、底部の厚さ約七・五〜八メートル。城壁の頂部は地表から約一メートル地下に埋まっている。城壁の四隅及び各城壁の中央にはそれぞれ外へ突出した方形の建築物が設けられている。長さ・幅ともに約二〇メートル。角楼・物見台あるいは城門と考えられる。南門は南壁の中央よりやや東に設けられている。幅約七・五メートル。門道兩側の城壁及び門内の地表には火で焼けた痕跡がある。南北に走る道路が南門を貫いており、南門の外で東へ折れている。この道路は磚で舗装されている。出土物と建築材料からすると、城址の年代はおおむね後漢から北魏である。漢代の眉県城の東北に位置することから考えると、後漢末期に董卓が

築いた「郿塢城」である可能性が高い、と。我々が訪れたときには、まだ発掘作業が行われていた。今後の発掘の進展及び報告が待たれる。

一五時五〇分に柳巷城址を発ち、西安へ向かった。西安市内の西安城市酒店泊。

九月四日（水）

本日は各自飛行機の時間まで自由行動。水間・柿沼は西安博物院を見学。猪原・峰雪は大慈恩寺・大雁塔を見学後、西安の城壁にのぼり、市街地を自転車一周するなどした。その後、水間はMU二二八七で厦門へ帰宅。柿沼・猪原・峰雪はMU二二一五で北京へ移動し、翌五日に猪原はCA一六一で関西国際空港へ、峰雪はNH一六〇で関西国際空港へ帰着。柿沼は北京で資料収集を行い、九日にJL八六四で成田へ帰着。

注

- (1) 嚴耕望『唐代交通図考卷三 秦嶺仇池区』（中央研究院歷史語言研究所、一九八五年）参照。他にも西安―秦嶺山脈―漢中を結ぶ交通路について論じたものに、黒澤信吾「秦棧道の研究―特に漢・三国時代に於ける褒斜道を中心として―」（『史潮』第六号、一九三六年）、久村因「秦漢時代の入蜀路に就いて（上）（下）」（『東洋学報』第三八卷第二・三号、一九五五・五六年）等がある。
- (2) このとき劉邦が具体的にどの道を選んだかには諸説ある。たとえば久村因「秦漢時代の入蜀路に就いて（上）（下）」は、劉邦が

漢中に入った道を襄斜道、漢中から三秦に出た道を陳倉道とする。

- (3) 張維輯『仇池国志』（甘肅省銀行、一九四九年）、李祖桓『仇池国志』（書目文獻出版社、一九八六年）等参照。仇池国期の交通に關する研究に、前田正名「四世紀の仇池国」（立正大学教養部紀要）第一号、一九六七年、前田正名「四世紀前半期における漢中盆地の地域構造に関する論稿」（山崎先生退官記念會編『東洋史学論集 山崎先生退官記念』大安、一九六七年）等がある。

- (4) 日本人による秦嶺山脈周辺踏査記録に、竹添光鴻『棧雲峽兩日記』（奎文堂、一八七八年跋）がある。竹添光鴻は竹添進一郎、竹添井井ともいう。明治の外交官で、西安・宝鶏から新襄斜道を通じて漢中へ抜けた。岩城秀夫氏による訳注『棧雲峽兩日記』（平凡社、二〇〇〇年）もある。その他、近年では鶴間和幸氏等も調査を行っている。「一九九九年の西安―天水間中心の黄土高原西部調査記録」（『アジア遊学』第二〇号、勉誠出版、二〇〇〇年）参照。

- (5) 水間大輔・柿沼陽平「青海省北部漢代遺址等視察記」（『史滴』第三二号、二〇一〇年）参照。

- (6) 嚴耕望『唐代交通図考卷二 河隴嶺西区』三四一―四一九頁参照。

- (7) 宝鶏炎帝研究会・宝鶏周秦文化研究会編『宝鶏建城歴史与得名』（三秦出版社、二〇〇七年）等参照。

- (8) 后曉榮『戦国政区地理』（文物出版社、二〇一三年）二五四頁等参照。

- (9) 宝鶏炎帝研究会・宝鶏周秦文化研究会編『宝鶏建城歴史与得名』等参照。

- (10) 『元和郡県図志』卷二 関内道鳳翔府鳳翔節度使管州二宝鶏県条に「陳倉故城、在今縣東二十里、即秦文公所築。『魏略』云「太和中、將軍郝昭築陳倉城……」。按今城有上下二城相連、上城是秦文公築、下城是郝昭築」とある。

- (11) 『三國志』卷一 魏書武帝紀建安二〇年三月条に「公（曹操）西征張魯至陳倉、將自武都入氐。氐人塞道、先遣張郃・朱靈等攻破之。夏四月、公自陳倉以出散關、至河池」、同卷九 魏書夏侯淵伝に「建安」十七年、太祖乃還關、以〔夏侯〕淵行護軍將軍、督朱靈・路招等屯長安……十九年……〔馬〕超奔漢中、還關祁山。〔姜〕敘等急求救、諸將議者欲須太祖節度……〔夏侯淵〕遂行、使張郃督步騎五千在前、從陳倉狹道入、淵自督糧在後。郃至渭水上、〔馬〕超將氐羌數千遊郃。未戰、超走、郃進軍收超軍器械。淵到、諸縣皆已降」とある。

- (12) 『三國志』卷三 魏書明帝紀太和二年条に「十二月、諸葛亮聞陳倉、曹真遣將軍費曜等拒之、裴松之注引『魏略』に「先是、使將軍郝昭築陳倉城。會亮至、圍昭、不能拔。……亮自以有眾數萬、而昭兵纔千餘人、又度東救未能便到、乃進兵攻昭、起雲梯・衝車以臨城。昭於是以火箭逆射其雲梯、梯然、梯上人皆燒死。昭又以繩連石磨壓其衝車、衝車折。亮乃更爲井闌百尺以射城中、以土丸填塹、欲直攀城、昭又於內築重牆。亮又爲地突、欲踊出於城裏、昭又於城內穿地橫截之。晝夜相攻拒二十餘日、亮無計、救至、引退」、『元和郡県図志』関内道鳳翔府鳳翔節度使管州二宝鶏県条引『魏略』にも、「會諸葛亮來攻。亮本聞陳倉城惡、及至怪其整頓、聞知昭在其中、大驚愕。亮素聞昭在西有威名、念攻之不易。……亮進兵、雲梯衝車、晝夜攻距、二十餘日、亮無利、會費曜等救至亮乃引去、〔統漢書〕郡国志一司隸右扶風陳倉県条劉昭注引『三秦記』に「秦武公都雍、陳倉城是也」とある。

- (13) 財団法人東洋文庫中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注 渭水編』上（東洋文庫、二〇〇八年）vii頁参照。

- (14) 蘇秉琦『關中台溝東区墓葬』（國立北平研究院史學研究所、一九四八年）三―八頁参照。

- (15) 国家文物局主編『中国文物地圖集 陝西分冊』下冊（陝西地圖

出版社、一九九八年）二〇三頁参照。

- (16) 『資治通鑑』卷二五六唐紀七二僖宗惠聖恭定孝皇帝下之上光啓二年（八八六年）条に「田令孜奉土發寶雞、留禁兵守石鼻爲後拒」、胡三省注に「潘氏在寶雞東北。石鼻在寶雞西南、亦曰靈壁。蘇軾曰「鳳翔府寶雞縣城鎮、即俗所謂石鼻寨也。諸葛武侯所築城、去寶雞三十里」、明・彭大翼『山堂肆考』卷二二石鼻寨条に「石鼻寨在鳳翔府寶雞縣東、諸葛亮所築、以拒郝昭。蓋行人自北入蜀者至此漸入山、自蜀赴洛者至此已出山」とある。
- (17) 以上三説に關しては、劉曉応『鉄馬秋風大散関——古大散関旅旅游景区導游講解詞』（宝鸡市渭滨区古大散関文化博覧館編『古大散関』宝鸡古大散関文化博覧館、二〇一〇年）参照。
- (18) 『後漢書』宗室四王三侯列伝順陽懷侯嘉条一延、岑引北人散関の李賢注に「散関、故城在今陳倉縣南十里、有散谷水、因取名焉」とある。
- (19) 馬正林「関于古散関遺址」（『人文雜誌』一九八六年第一期）、関治中「関中要塞考序——関中要塞研究之一」（『渭南師專學報』社会科学版一九九八年第三期）、劉樹友「秦嶺諸関考——関中要塞研究之四」（『渭南師專學報』社会科学版一九九九年第四期）参照。
- (20) 梁福義「古散関遺址弁正」（『人文雜誌』一九八四年第一期）、李仲操「歷代散関遺址小考」（『人文雜誌』一九八五年第六期）、葛祥隣「宝鶏人对大散関的認識和開發」（『宝鶏社会科学』一九九九年第四期）参照。
- (21) 李仲操「歷代散関遺址小考」参照。
- (22) 『樂府詩集』卷二六「秋胡行」参照。
- (23) 国家民政部・復旦大学歴史地理研究中心編『中国古今地名大詞典』（上海辞書出版社、二〇〇五年）四二三頁参照。
- (24) 『中国文物地圖集 陝西分冊』下冊三三四頁参照。
- (25) 張鴻（責任編輯）『陝西省公路里程 地圖冊』（西安地圖出版社、二〇一三年）によると、眉県から太白県嶺頭鎮、漢中市漢台区を抜けて四川省へつながる高速道路が建設中とされる。
- (26) 李之勤「褒河上游幾個与諸葛亮有關的地名及其在古代交通上的意義」（『文博』一九九四年第二期）参照。
- (27) 郭榮章「諸葛亮興兵攻魏所走的褒斜棧道」（『陝西理工大学学报』社会科学版一九八四年第二期）参照。
- (28) 陳顯遠「褒斜棧道中幾個重要地名考訂」（『成都大学学报』社科版一九八九年第一期）参照。
- (29) 『三國志』卷三六蜀書趙雲伝裴松之注引「雲別伝」に「其物請悉入赤岸府庫」、「水経注」卷二七沔水に「時趙子龍與鄧伯苗、一戍赤崖屯田、一戍赤崖口、但得綠崖與伯苗相聞而已」、「水経注」沔水所引「与兒堽書」に「前趙子龍退軍、燒壞赤崖以北閣道」とある。
- (30) 『晉書』卷一宣帝紀に「追到赤岸、乃知亮死審問。時百姓爲之諺曰「死諸葛走生仲達」とある。
- (31) 嚴耕望『唐代交通図考卷三 秦嶺仇池区』七四一〜七四四頁参照。
- (32) 陝西省留壩県地方志編纂委員会『留壩県志』陝西人民出版社、二〇〇二年）七二七〜七二八頁に掲載されている現地の「寒溪夜漲」説話参照。現地観光用案内板も同様に記されていた。
- (33) 陝西省考古研究所「褒斜道石門付近棧道遺迹及題刻的調査」（『文物』一九九四年第一期）参照。
- (34) 方孝文編著『褒谷石門』（漢中市石門水庫管理局、二〇〇三年）六〜三八頁参照。
- (35) 漢中市地方志編纂委員会『漢中市志』（中共中央党校出版社、一九九四年）七三五〜七三六頁参照。
- (36) 『太平寰宇記』卷一三三山南西道一興元府南鄭県条に「拜將壇。漢高祖初爲漢王、欲東下、拜韓信爲將、因築此壇受命」とある。
- (37) 『元和郡県図志』卷二山南道三興元府城固県条参照。

- (38) Buck, John Lossing. 1937. Land utilization in China. Shanghai: The Commercial press. ただし、もちろん中国古代の環境が現代中国と同じという意味ではない。この点は原宗子『農業』「主義と「黄土」の発生」(研文出版、二〇〇五年)等参照。
- (39) 陳顯遠「陝西城固県の東漢李固墓」、『文物』一九七四年(二期)参照。
- (40) 『水経注』河水に「漢太尉李固墓、碑銘尚存、文字剥落、不可復識」とある。
- (41) 『後漢書』李固列伝李賢注引謝承『後漢書』等参照。
- (42) 『後漢書』李固列伝参照。
- (43) 明・祁光宗『関中陵墓志』清鈔本『漢李固墓』条に「今墓去城固縣西三十里、唐草阜作碑、今亡」とある。
- (44) 陳顯遠「西北聯大発掘張鞏墓始末」(『文博』一九九八年第四期)、姚遠「西北大学対漢博望侯張鞏墓の発掘与増修」(『西北大学学报』哲学社会科学版二〇〇六年第六期)、卜琳・白海峰・田旭東・梁文婷「張鞏墓考古記述」(『考古与文物』二〇一三年第二期)参照。墓前出土の石獸については林通雁「西漢張鞏墓大石翼獸探考」(『漢中師院学报』哲学社会科学版一九八六年第二期)参照。
- (45) 『三国志』卷三三蜀書後主伝に「建興七年」冬、(諸葛)亮徙府營於南山下原上、築漢・樂二城、(『水経注』河水引「華陽国志」に「蜀以成固爲樂城縣也」とある。
- (46) 唐・杜佑『通典』卷一七五州郡五「西縣」注に「後魏置蟠塚縣、隋爲西縣。故西樂城在縣西南。諸葛亮所立、甚險固、南宋・王忠麟『通鑑地理通釈』卷一三三固形勢攷に「通鑑」築漢城於沔陽、樂城於成固。二縣屬漢中郡、沔陽今興元府西縣。成固今城固縣。『通典』故西樂城在西縣西南、武侯所立甚險固、北宋・歐陽忞『輿地広記』卷三三利州路に「城固縣……蜀改爲樂城」とある。
- (47) 王臣主編『諸葛年譜』(甘肅文化出版社、一九九五年)二五・二六頁等参照。
- (48) 郭榮章「諸葛亮興兵攻魏所走的褒斜棧道」(『陝西理工大学学报』社会科学版一九八四年第二期)、郭榮章「諸葛亮出斜谷的行軍之道」(『成都大学学报』社会科学版一九九二年第二期)参照。
- (49) 李之勤「諸葛亮北出五丈原取道城固小河口說質疑」(『西北大学学报』哲学社会科学版一九八五年三期)、晏波「諸葛亮」六出祁山諸問題新探」(『成都大学学报』社科版二〇〇九年第一期)参照。もっとも、未陽市の蔡倫墓については衣冠墓とする説もある。
- (50) 蔡桂生・劉徳和「蔡倫的墓葬究竟在哪里」(『中国造纸』一九八三年第六期)参照。
- (51) 『後漢書』宦者列伝蔡倫条に「元初元年(一四四年)、鄧太后以偷入宿衛、封爲龍亭侯、李賢注に「龍亭、縣、故城在今洋州興縣東、明月池在其側。邑三百戸」とある。
- (52) ちなみに、清・劉於義『陝西通志』卷七二陵墓には「漢龍亭侯蔡倫墓。在縣東二十五里、在龍亭舖南園一畝、許龜螭埋沒墓址一畝二分。有祭田載碑記年遠、碑毀土人侵佔、知縣鄒溶整復之」とある。
- (53) 『三国志』蜀書諸葛亮伝に「亮遺命葬漢中定軍山、因山爲墳、冢足容棺、歛以時服、不須器物。……景耀六年春、詔爲亮立廟於沔陽、(『水経注』河水に「諸葛亮之死也、遺令葬于其山、因即地勢、不起墳壘、惟深松茂柏、攢蔚川阜、莫知墓塋所在」とある。
- (54) 左湯泉編著『漢中文物古迹攬勝』(東方出版社、二〇〇二年)二七頁参照。
- (55) 左湯泉編著『漢中文物古迹攬勝』六九頁参照。
- (56) 明・楊時偉編『諸葛忠武書』卷九遺事に「八陣圖在定軍山下、諸葛亮所作。又督軍壇亦在山下、亮嘗督軍於此。鄉人言每陰雨時聞有擊鼓聲」とある。
- (57) 『諸葛忠武書』卷九遺事に「武侯兵書匣在定軍山上壁。立萬勿非

- 人迹可登凡兩經其地。初視匣、其色淡紅、後則鮮明。若更新者、殆不可曉」とある。
- (58) 郭清華・侯素柏『諸葛亮与中国武侯祠』(陝西旅游出版社、二〇〇二年)一一五頁参照。
- (59) 陶喨之「石馬遺址与魏延冤案」(『四川文物』一九八九年第四期)参照。
- (60) 『乾隆南鄭県志』卷一〇古蹟に「蜀漢南鄭侯魏延墓。相傳在北門外四里石馬堰、有石馬立田間……」とある。
- (61) 蘇漢平・欧徳録編著『諸葛亮与漢中』(陝南武侯祠、一九九六年)七九頁参照。
- (62) 陶喨之「石馬遺址与魏延冤案」、郭鵬主編『西漢三国時期的漢中』(三秦出版社、二〇〇五年)八一頁参照。
- (63) 左湯泉編著『漢中文物古迹攬勝』一九五〇一九七頁参照。
- (64) 『大清一統志』卷一八六漢中府二陵墓に「張疑墓在褒城縣東栢鄉街、世呼褒徳侯將軍墓」とある。
- (65) 蘇漢平・欧徳録編著『諸葛亮与漢中』七九頁参照。
- (66) 張東「古蜀道上的三国史迹——馬超及其墓祠」(漢中市博物館等編『棧道歴史研究与3S技術応用』陝西人民教育出版社、二〇〇八年)参照。
- (67) 『古今圖書集成』卷五二九漢中府部に「馬超墓。在縣東三里。漢建安(興)の誤り」五年、諸葛亮行軍沔陽、親詣墳所設祭、令其弟馬岱掛孝衣帛。今名馬場」とある。この伝承は『三国演義』に基づくか。
- (68) 『関中陵墓志』清鈔本「漢馬超墓」に「沔縣東三里有超墓。按、漢建安五年、諸葛武侯軍至沔陽、親詣墳所、設祭。今名馬場」とある。
- (69) 『古今圖書集成』卷一一三五安陸府「馬超墓」条に「相傳其墓有三。一在東門外聚奎井之旁。崇禎初、里人掘井得髑髏如斗大、疑即超首也。或云在泰山廟旁。又云在教場關外」(『乾隆四川通志』卷二九上陵墓に「馬超墓。在新都縣南三里」)、『雍正陝西通志』卷七一陵墓二「馬將軍超墓」条按語に「四川通志」新都縣南三里亦有馬孟超墓、未知孰是」、畢沅『漢中勝蹟圖志』卷二二古蹟郊邑に「謹按『四川通志』新都縣南亦有馬孟超墓、未知孰是」とある。
- (70) 郭清華・侯素柏『諸葛亮与中国武侯祠』一〇一〜一〇七頁参照。
- (71) 郭清華・侯素柏『勉県風光名勝博覽』(陝西省勉県博物館、二〇〇二年)九頁参照。
- (72) 左湯泉編著『漢中文物古迹攬勝』六九頁参照。
- (73) 陳顕遠「勉県武侯祠」唐碑、初考」(『漢中師院学报』哲学社会科学版一九八四年一期)、郭清華・侯素柏『諸葛亮与中国武侯祠』一〇〇頁参照。
- (74) 『三国志』魏書武帝紀に「秋七月、公至陽平。張魯使弟衛興將楊昂等據陽平關、横山築城十餘里、攻之不能拔、乃引軍還、同魏書夏侯淵伝に「建安」二十三年、劉備軍陽平關、淵率諸將拒之、相守連年」とある。
- (75) 左湯泉編著『漢中文物古迹攬勝』一二六・一二七頁参照。
- (76) 孫啓祥「漢末曹劉漢中爭奪地名考」(『襄樊学院学报』二〇〇二年第一期)、張東「古陽平関考述」(『成都大学学报』社科版二〇〇二年第一期)参照。
- (77) 白眉初「諸葛亮出師六次路線略考」(『地理雜誌』第一八卷第四号、一九三〇年)参照。
- (78) 『水経注』沔水に「灑水又南逕張魯治東、水西山上有張天師堂、於今民事之。庾仲雍謂山爲白馬塞、堂爲張魯治。東對白馬城、一名陽平關」、『通典』卷一七五州郡五「西縣」注に「關城俗名張魯城、在縣西四十里。隋置關在縣西南、今名百年關」とある。
- (79) 勉県志編纂委員会『勉県志』(地震出版社、一九八九年)五二七頁参照。

- (80) 『三国志』蜀書諸葛亮伝建興七年春条に「亮遣陳式攻武都・陰平、遂克定二郡。亮徙府營於南山下原上築漢・樂二城、是歲、孫權稱帝、與蜀約盟共交分天下」、『華陽國志』卷二漢中志に「蜀時沔陽爲漢城」、王忠麟『玉海』卷一七三蜀漢漢樂城条に「(建興)七年冬築漢樂二城」とある。
- (81) 『雍正陝西通志』卷一四城池に「沔縣城池。蜀漢建興七年、丞相諸葛亮築漢・樂二城。漢城即沔城也。倚山據平地垣堞以土」、関中勝蹟圖志』卷一九地理引「畧城通志」に「蜀漢建興七年、諸葛亮築漢・樂二城。漢城即沔城也。倚山垣堞以土」とある。
- (82) 郭清華・侯素柏「諸葛亮与中国武侯祠」一一四頁参照。
- (83) 漢中市地方志弁公室『漢中地区志』第三冊(三秦出版社、二〇〇五年)一六三二頁参照。
- (84) 『三国志』蜀書諸葛亮伝に「亮拔西縣千餘家、還于漢中」とある。
- (85) 白眉初「諸葛亮出師六次路線略考」参照。
- (86) 黄英「祁山・西城・街亭弁」(『教学研究』一九八二年第一期)、譚其驥主編『中国歴史地図集』第三冊(地図出版社、一九八二年)一五・一六頁も西県を西和県より北に比定している。
- (87) 羅新「仇池行」(『文史知識』二〇〇二年第一期)、王蓬「尋訪仇池古国」(『糸綯之路』二〇〇五年第四期)参照。
- (88) 『乾隆西和県志』卷一山川攷に「鳳凰山 城西上有十二連城、宋紹興時吳玠所築。今遺址猶存、同卷一城池攷に「宋州城在崆峒山下、今縣城西北。高宗南渡後、紹興元年以吳玠爲鎮西軍節度使、又於南山高峻處築十二連城、聯綴相屬。即今之所謂上城」とある。
- (89) 国家文物局主編『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊(測繪出版社、二〇〇一年)七一七頁参照。
- (90) 趙遠夫「王公儀生平、家世与交游考述」(『天水師範学院学报』二〇一一年第六期)参照。
- (91) 『太平御覽』卷四四地部九祁山条が引く『周地圖地記』(撰者未

詳)には「其城即漢時守將所築」とある。これによると、祁山堡は漢代に初めて築かれたことになる。一方、賈利民氏は『水経注』漾水の記述を根拠として、祁山堡は後漢の献帝元年に初めて建設され、当初は「建安城」と呼ばれていたと解している。「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」(『天水師範学院学报』二〇〇四年第四期)参照。しかし、『水経注』漾水にはそのような記述が見えず、「楊定自隴右徙治涇城、即此處也。去仇池一百二十里。後改爲建安城」とあり、仇池国の楊定が国都を隴右から涇城へ遷し、後に建安城と改めたとされており、建安城は祁山堡とは関係がなく、年代も異なっている。

- (92) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (93) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (94) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (95) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (96) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (97) ただし、『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊七二七頁では何台堡址を清代の城址としている。後述する通り、この城址は残存状況が極めて良好なので、清代の改修を経ているのかもしれない。
- (98) 『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊七二七頁では城壁の長さを南北一五七メートル、東西九一メートルとする。
- (99) 『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊七二七頁では城壁の残高を一・四メートルとする。
- (100) 『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊七二七頁では底部の厚さ五メートル、頂部の厚さ二・八メートルとする。
- (101) 『中国文物地圖集 甘肅分冊』下冊七二七頁参照。
- (102) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。
- (103) Google Earth の衛星写真上での測量による。賈利民氏は祁山堡の北東約二キロに位置するというのが(『諸葛亮与祁山歴史遺迹考述』)、

それほど距離はない。

(104) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。

(105) 賈利民「諸葛亮与祁山歴史遺迹考述」参照。

(106) 今本「漢書」卷二八下地理志下隴西郡西県条にはこのような記述がない。王念孫、楊守敬はこの記述を根拠として、今本では「有鹽官」が脱けており、これを補うべきとする。「読書雑誌」巻五漢書第七、「水経注疏」。

ちなみに、近年漢長安城付近で発見された秦封泥の中に「西鹽」と記されたものがあり、徐衛民氏はこれを西県塩官の印の封泥と解している。「天水附近秦都城考論」(「天水師專學報」綜合版一九九九年第四期)参照。この解釈が正しいとすれば、西県には既に秦のときから塩官が置かれていたことになる。

(107) 以下、塩官鎮及び塩井祠については、張秀玲「塩井与周秦発祥」(「檔案」一九九七年第五期)、陳芳芳「没落的民間記憶——甘肅省礼県塩官鎮塩神廟及其廟会考察研究」(《民俗研究》二〇〇九年第四期)、陳建栄主編『礼県史話』(甘肅文化出版社、二〇一一年)六九〜七五頁、趙琪偉「甘肅塩官塩神信仰」(《尋根》二〇一二年第六期)、魯建平「尊崇与羈絆·西陲「塩婆婆」神崇拜的三元对立」(《甘肅高師學報》二〇一三年第四期)などを参照した。なお、現地に伝わる製塩技術を分析したものに、凌雪ほか「甘肅礼県塩官鎮井塩製塩工芸的科技初探」(《塩業史研究》二〇一二年第二期)がある。

(108) 林家英・王徳全「評述弁踪学杜詩——杜甫由秦州赴同穀紀行詩实地考察散記」(《蘭州大学学报》社会科学版一九八五年第二期)、蔡副全「從葉昌熾「縁督廬日記」看杜甫隴右行踪」(《杜甫研究學刊》二〇一一年第四期)など参照。

(109) 塩官鎮の塩井及び塩婆婆をめぐるのは、さまざまな伝説がある。詳しくは陳芳芳「没落的民間記憶」、陳建栄主編『礼県史話』七五

〜七八頁、趙琪偉「甘肅塩官塩神信仰」、魯建平「西垂塩井源起新考」(《塩業史研究》二〇一三年第一期)、「尊崇与羈絆」など参照。

(110) 歴代の地方志など、伝世文獻には塩井祠・塩婆婆についての記述が見えない。境内には明の嘉靖年間の「重修塩井碑記」があるが、もっぱら塩井について述べたものであり、塩井祠・塩婆婆については一切言及されていない。陳芳芳氏によると、境内には他にも民国期の「建修塩神廟碑記」があり、「神之廟址……不知其幾十百年矣、依稀然不可復識。其建也何代何人不得而知之」と刻まれている。「没落的民間記憶」参照。それゆえ、遅くとも民国期までには塩井祠・塩婆婆が祀られていたことになる。ちなみに、清末民初の金石学者葉昌熾は光緒二十九年(一九〇三年)三月一四日、四月一六日、同三年(一九〇五年)三月一日に塩官鎮を訪れ、「縁督廬日記」の三月一四日(巻二)と四月一六日(巻二)の記事では塩井について言及しており、中でも三月一四日では「南門外」の塩井について言及している。塩井祠もかつての塩官鎮南門の外に位置するので、ここでいう南門外の塩井とは塩井祠内の塩井を指すものと思われる。にもかかわらず、塩井祠については全く言及されていない。

(111) 境内の様子については、陳芳芳氏が詳しく紹介している。「没落的民間記憶」参照。

(112) 塩婆婆という女神が信仰されていることについて、女神信仰を特徴とする「早期秦文化」との関連を指摘する見解もある。趙琪偉「甘肅塩官塩神信仰」、魯建平「尊崇与羈絆」など参照。しかし、そもそも塩婆婆信仰がいつから始まったのかは定かでなく、仮に数百年の歴史があったとしても、それを早期秦文化の影響といえるのかは疑問である。

(113) 劉雁翔「伏羲廟志」(蘭州大学出版社、一九九五年)六〇頁参照。

(114) 伏羲廟の沿革については、劉雁翔「伏羲廟志」五一〜六三頁、

一一〇～一二六頁参照。

(115) 以下、李弘墓については馬天彩『天水史話』（甘肅人民出版社、一九九二年）三七・三八頁を参照した。

(116) 徐日輝『秦州史地』（陝西人民美術出版社、一九九四年）五六頁（該書部分の初出は「街亭考」（『蘭州大学学报』社会科学版一九八三年第三期）。以下同じ）など参照。

(117) 王文傑氏によると、隴城鎮の西番寺にある碑には「當在戰國時、阿育王割據斯地。秦始皇誅阿育後、鑿險洞於積麥崖、崖在鎮之西南、建立廟宇曰無憂寺」と記されているらしい。「漢街城考」（『甘肅社会科学』二〇〇三年第五期）参照。「阿育王」というと、一般にインド・マウリヤ朝のアショーク王を指すが、この碑文によれば戦国時代にこの地に割拠した諸侯の一人のごとくである。もちろん、史実とは考えがたい。

(118) 『統漢書』郡国志五漢陽郡条に「略陽有街泉亭」、劉昭注に「街泉故縣、省」とある。これによると、街泉県は後漢に廃止されて亭となり、略陽県へ編入されたこととくである。

(119) 先行研究については孫啓祥「街亭位于隴関道西口獻疑——兼論街亭在天水市東南的合理性」（『襄藝学院学报』二〇一一年第一期）など参照。もっとも、孫氏自身は街亭が隴城鎮にあったとする説を批判し、天水市麦積鎮街亭村の街亭故址こそが『三國志』の記述と比較的一致すると主張している。

(120) 徐日輝『秦州史地』五六頁参照。

(121) 『中国文物地圖集』甘肅分冊、下冊一五一・一五二頁参照。

(122) 『中国文物地圖集』甘肅分冊は、城壁は長方形を呈しているとするが、王文傑氏は八角形を呈しているとする。「漢街城考」参照。

(123) 王文傑氏によると、他にも八つの砲台が設けられていたという。「漢街城考」参照。

(124) 徐日輝「街亭考」、王文傑「漢街城考」参照。ただし王氏は、築

城年代は戦国時代に遡ると解している。

(125) 徐日輝『秦州史地』五一頁参照。

(126) 霍彦儒「保護陳倉古城遺址和宝鶏古城牆駐留城市歷史記憶」（『宝鶏社会科学』二〇一二年第二期）参照。

(127) 唐蘭「石鼓年代考」（『故宮博物院院刊』一九五八年第一期）によると、「順治宝鶏県志」卷三に「石鼓寺、治東三十五里石鼻寨故城内、即故天興縣地」とあるらしい。『順治宝鶏県志』は北京図書館に一部現存するのみであり、未見である。

(128) 宝鶏県志編纂委員会『宝鶏県志』（陝西人民出版社、一九九六年）七九四頁参照。

(129) 五丈原は以前、五丈原鎮に属していたが、同鎮は二〇一一年に廃止され、蔡家坡鎮へ統合された。

(130) 袁全福主編『五丈原攬勝』（陝西旅游出版社、二〇一一年）二四・一五頁参照。

(131) 『五丈原攬勝』二二三頁参照。

(132) 『五丈原攬勝』五頁参照。

(133) 『五丈原攬勝』三七頁参照。

(134) 『統漢書』郡国志一右扶風武功県条に「有斜谷」、劉昭注引西征賦注に「褒斜谷、在長安西南。南口褒、北口斜、長百七十里。其水南流」とある。

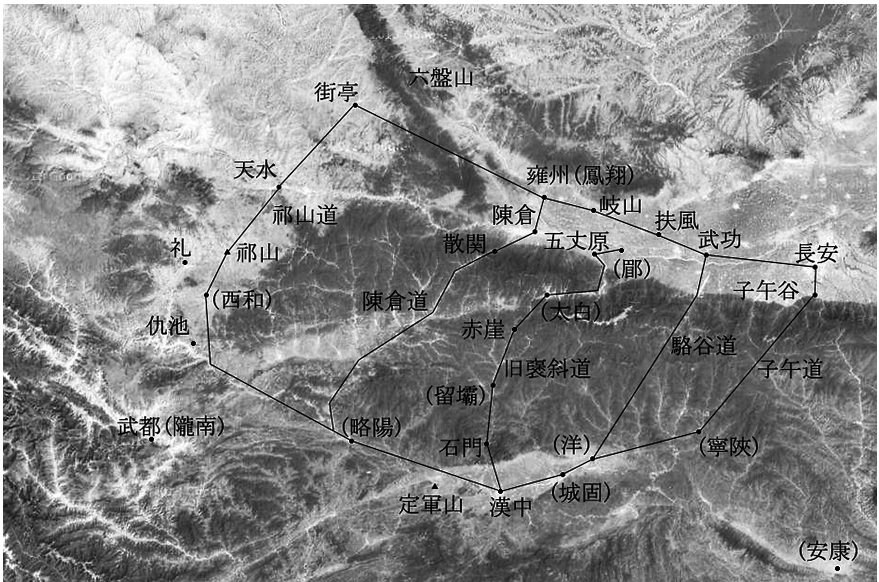
(135) 陝西省考古研究院「二〇一一年陝西省考古研究院考古発掘新収獲」（『考古与文物』二〇一二年第二期）、二〇一二年陝西省考古研究院考古発掘新収獲」（『考古与文物』二〇一三年第二期）参照。

（水間大輔：厦門大学歴史学系副教授）
（柿沼陽平：帝京大学文学部専任講師）

（猪原達生：大阪大学文学研究科博士後期課程
日本学術振興会特別研究員）

（峰雪幸人：本学大学院博士後期課程在籍）

〔付記〕本稿は、柿沼陽平の公益財団リそなアジア・オセアニア財団調査研究助成（研究課題「中国南北朝時代の貨幣経済と周辺諸地域」）および、猪原達生の平成二五年度科学研究費補助金特別研究員奨励費（研究課題「唐代における宦官の制度とその実態に関する総合的研究」）による研究成果の一部である。



〔地図〕